

男の進む軌跡

泡泡

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

百日戦役と言う出来事から表舞台に現れた人嫌いの青年の軌跡です。この作品は空の軌跡から碧の軌跡までを舞台にオリキャラを登場させたものです。

目次

空の軌跡FC

百日戦役①	1
百日戦役②	4
黒髪の少年	11
用語説明	20
番外編①	24
旅立つ二人	32
女王と親衛隊隊長	38
マノリア村	44
孤児院	52
旧知の友【改訂】	61
11話	75

空の軌跡FC

百日戦役①

七曜曆しちようれき1192年春の事だ。一発の砲弾が、リベール王国北部に位置するハーケン門を揺るがした。のちに『百日戦役』と呼ばれる争いへと発展してゆくことになるのだが、それを誰が予想できただろうか。

ハーケン門の城壁は、中世の壁を補強しただけのものでいともしもたやすく強固と思われていたその城壁は打ち破られた。砲弾を撃った帝国が使っていた導力性の戦車はその当時、最新のものときれているラインフォルト社のものだったので易々と破壊やすやすしていった。

最初の砲弾が揺るがしたのと同時刻、王都グランセルにある帝国大使館から、一通の書状がグランセル城のアリシア女王の所に届けられていた。すなわちエレボニア帝国がこれから行なうリベール王国への宣戦布告文書である。砲弾発射と同時に宣戦布告を行い、その着弾をもつて先制攻撃とするという巧妙な正當化が行われたのである。それは導力通信を利用した綿密な連携なくしては成立しえない新たな外交戦術とも言え

た。

ハーケン門を文字通り粉碎した帝国軍は、そのままリベール領土の侵略を開始した。総兵力13個師団。これは全帝国軍の半数近くにして、王国軍の3倍近い規模に及ぶ大兵团である。開戦からわずか1ヶ月で、帝国軍はグランセル地方とレイストン要塞を除く全王国領土占領する。王国の親しい隣人で、帝国と長年に渡って対立してきたカルバード共和国も、迅速極まる電撃作戦の前に援軍を派遣する機会を逸してしまう。

そして帝国軍は、ツアイス中央工房やマルガ鉱山を接收しつつ、王都の女王に降伏を迫るのであった。しかし思いもよらぬ助けというのは往々にして現れるものだ。

3隻の軍用警備艇がレイストン要塞内で開発され、宿将モルガン將軍の指揮の元、大規模な反攻作戦が実行されたのである。戦車をはるかに上回る重装甲と、高性能の導力兵器を大量に搭載しながら、時速1800セルジュもの機動性を実現した警備艇を使って、精鋭中の精鋭と謳われた独立機動部隊が地方間を結ぶ関所を奪還した。そして王国軍の総兵力がレイストン要塞から水上艇で出撃し、各地方で孤立した帝国軍師団を各個撃破したのである。

※セルジュに関して。1セルジュ＝100メートル。

開戦から3ヶ月後、各地で抵抗を続けていた帝国軍師団の大部分は降伏した。それでも帝国本土から更なる増援の動きも見られたが、ここに至ってカルバード共和国を中心に大陸諸国がこぞって帝国への非難声明を出し、援軍派遣の動きが具体化していった。そんな中、七耀教会と遊撃士協会が協同で停戦を呼びかけ、開戦からおよそ百日ほどで戦争は終結した。それゆえ『百日戦役』と呼ばれる。

翌1193年、王都郊外のエルベ離宮でリベールとエレボニア間の講和条約が結ばれた。賠償金は支払われなかったが、「不幸な誤解から生じた過ち」という表現で、帝国政府から正式な謝罪声明が出された。

ここまではリベールに住む者なら誰でも知る歴史の数ページに過ぎない。しかし、市民の中では孤軍奮闘しながらも必死に抗った者もいるのだが……。そしてこれから語る青年は、過去にあった事柄ゆえに人との付き合いを最小限に抑えて生きていた青年の話だが百日戦役を境さかいにしてどのようになら変わったのだろうか。

その青年の軌跡と言うものに焦点を合わせてみよう。

百日戦役②

「ひびく……」

見渡す限り、瓦礫の山ができている。誰も傷つきそして疲弊している。そこからここへと悲鳴が絶えず聞こえていた。そこに一人の青年が現れた。誰かが見ていたなら不思議さに気づいたであろう。そう彼はどこも怪我を負っていないかったのだ。ここにいる人は大なり小なり怪我を負っている。だが五体満足で立っているのだ。

『お母さんくどくど?』

『誰か助けてくれ。』

『ここに人がいる。誰でもいいから助けてくれ。』

切羽詰った声が街全体を覆っていた。

「……」

その青年はそれを他人事、所詮自分が関係することではないと見ていたかもしれない。だからそこをすぐに離れようとした。するとその街のシンボルでもある時計塔が倒れてくるのが見えた。砲弾により土台が脆くなっていたのだろう。それは静かに…

それでも着実に倒れていった。

一人の少女目がけて……。

「エステルッ……！」

母親らしき女性がまだ気づいていない少女を庇うようにして、時計塔のがれきから我が子を救った。だが、その代償は大きすぎた。自分が無事であるはずがない。

「お、おかあさん……？」

「エ、エステル、無事？」

「う、うん。かあさんがたすけてくれたから。」

「そう……。」

今にも事切れそうな女性に少女の目から溢れ出す大粒の涙。

「つ……。な、なんだ。今の感情は。」

それは一人の無表情な青年の心を大きく動かすのに十分すぎるほどだった。

「おかあさんっ、おかあさんっ。だれかたすけて。」

「……。（どうしてあの少女の流した涙が俺を揺さぶるんだ？）」

この感情の正体を探るべく、青年はその女性の元に歩み寄った。

「っ、だれでもいいですからたすけてください。」

「……。」

最初にその女性の上に覆いかぶさっていた全てのガレキを取り除いた。そしてその後、ティア・オルアーツによる怪我の手当てを行なった。

「お、おかあさんっ!・・・た、たすけてくれてありがとうございますっ。」

「礼はいい。お前の涙に惹かれただけの事。それより他にも手当が必要な人がいるだろう?ここの町長さんはいるか?」

「うん、あそこでつえをついているおじいさんがえらい人だよ。」

「そうか、ありがとう・・・。」

教えてくれた少女の頭を撫で偉い人の元に行く。女の子は撫でられたことに躍っていたが、満面の笑みを浮かべて母親の元に走っていった。傷は治したが失った血液はすぐには戻らない。なので気絶したままでベッドに横になっていた。

「おぬしは誰じゃ?」

「誰でもいい。それよりもここに重傷者や怪我人がどれだけいるか教えてもらえないだろうか?」

この街で見覚えのない人がいるので訝いぶかしむ町長だったが、その男性の迫る勢いで話しかけられたのでしどろもどろになりながら答えてくれた。

「そ、そのテントの中にいるのが怪我人じゃ。不幸中の幸いで亡くなった人は今のところおらんが・・・。」

「そうか、俺には治す手立てがある。そしてそれを今使わない手は無い。一纏めに集めてくれないだろうか？」

「それは助かるつ。じゃ、じゃがワシらにはお前さんにお礼することが出来ない。」

「俺はお礼欲しさにやるのではない。人間の暖かさに触れて自分勝手にやるだけの事……。」

「(人間?はて、まるで自分が人でないような言い方……)」

その後、町長や軽傷で済んだ人たちが軽傷以上の怪我を負った人たちを一纏めにした。

「これで全部ですか？」

「そうです。これで全員です。」

「では治します。ホーリー・ブレス……」

聞いたことのない詠唱後、外傷は消え骨折した人は歩けるぐらいまで回復を遂げることができた。

「おおつ……。みな、怪我が、治った。」

「ママ、パパ。」

「……。」

「お前さんのおかげでホント助かりました。ありがとうございます。」

「……礼には及ばない。まだやるべきことが沢山あるだろう。また助けが必要な時は願ってくれ。その時は、また現れよう」

「えっ?」

町長や町民が見ている中でその青年は霞がかかったように消え、姿はどこにも見出すことができなかつた。

「クラウスさん、今の人は……?」

「う、うむ。皆の聞きたいことは分かる。じゃが、今のところは保留にしておこう。今はまだやるべきことがある?」

「クラウスさんがそう言うなら。だが俺たちはあの人を責めるなんてことはしないさ。あの人に命を救ってもらったのだから!」

「そうさ、な。(伝承によると多分あれは……)」

く
ブ
ライ
ト
家

エステルは、他の人の助けを借りてなんとか母親を自分の家まで運ぶことに成功した。瓦礫に挟まれた時には、もう助からないかと思っていたが今では気を失っているだけ。血色が悪くなっていた顔にも血の気が戻ってきている。そして息も絶え絶えだった呼吸も落ち着いてきている。

「んしょ、んしょ……。」

エステルはそんな母親の為に小さい体を引きずって、額の上に冷たいタオルを置いたり替えたりして看病していた。だが、エステルの表情は悲嘆に暮れているものではなかった。希望に満ち溢れている顔だった。

「……………」

「おかあさんのぐあいはどうですか?」

「ええ、これなら大丈夫ですよ。あとは熱が下がったら一安心です。エステルさん、お願いできますか?」

「はいっ、大丈夫です。」

念のためクラウス市長が呼んだ医者が母親の様子を伺ったのだ。その結果、あと一息で目を覚ますということを知ったので希望に溢れていたのだ。

「おかあさん。」

「……………んっ、ここは……? あら、エステル?」

「お、おかあさんっ。ヒック、ヒック……………」

「あらあら、エステルはまだ赤ちゃんねえ〜。」

「エステル、赤ちゃんじゃないモン。」

自分の体に抱きついてきたエステルを、なだめすかすように母親は優しく抱擁する。

そして気づく。自分にあつたはずの怪我のなさに……。

「ねえ、エステル。どうして私は助かったの？」

「おかあさんを、はへんからたすけてくれた人がいたの。その人は、みんなのけがをな
おして消えたの……」

「そう。だったら、今度会った時はお礼言わないと、ね？」

「うんつ、エステルも言いたい。」

その日の夜は、その街は遅くまで歓喜の声で賑わっていた。それは名も言わぬ青年が
起こした奇跡にほかならないであろう。

・伝承・

彼の者——^か顕れる時、ゼムリアからの使者と知れ。それは始まりから終わりまで女神^{エイドス}
と共に在りし者。人ならざる者、しかし恐るにたらず。慈しむ心と共にあり。聖獣を従
えし神獣なり。

黒髪の少年

暖炉の火が煌々と照らし、夕方から夜へと移りつつあるエステル家の空間を暖かいものとしていた。広すぎず、狭すぎないちょうどよい広さの茶の間にはエステルが父親の帰りを今か今かと待っていた。

「うーん……。とーさん遅いなあ……。今日帰るってギルドから連絡があつたのにい。」座っていた椅子から降りて、窓から外を見る。憂いに沈んだその表情は父親がまだここにいないことを心底心配しているようだ。

「エステルは本当にお父さんが好きなのね。お母さんのことはもうどうでもいいの？」

「ふえっ？」

慌てて後ろを振り向くと、手を腰に当てたレナがにこやかにエステルを見守っていた。用事を足して部屋からエステルの元に戻ったのだろう。形式上の不機嫌さを表しながら、どことなく眺めているその顔は笑顔だ。

「もう……。お母さんの事も好きだよ。」

たたたとレナの元に走り寄ってエステルは腰らへんに抱きつく。それを優しく抱き返してレナはエステルと同じ視線へと腰をかがめた。

「分かってるわよ。エステルがお父さんと私のことを大好きだつてことぐらいはねっ！」

「うんっ」

満面の笑顔で頷き返す。

「（それにしてもあの時の男の人は見つからないのよね。私たち家族を救ってくれたあの人は・・・）」

あれからレナやカシウスはその青年の行方を探していた。勿論、市長にも尋ねてみたし他の住民にも聞いてみたりしたが、霞のように消えた・・・だけしか手掛かりはなかった。

「おーい、今帰ったぞー！」

玄関の方から聞きなれた男性の声が聞こえてくる。どうやらエステルが心待ちにしていた父親が帰ってきたようだ。

エステルとレナは手を繋いで玄関へと迎えに行つた。

「おとーさんー！」

「おかえりなさい。」

「ただいま、エステル、レナ。待たせちゃったようだな。いい子で留守番できていたか？」

「ふふん、あつたりまえよ☆とーさんのほうも何もなかった？魔獣とたたかって怪我とかしてない？」

「おお、ピンピンしているぞ。それよりエステル。実はお前にお土産があるんだ。」

「えっ、ホント？釣りザオ、スニーカー？それとも棒術の道具とか？」

「………育て方間違っちゃったか？」

女の子らしからぬ発言に少し……いやかなり意気消沈したカシウスだった。それとは対照的にレナのほうは、手を口に当ててどこか楽しい様子を見せている。

「それでお土産ってなんですか？その毛布に包まれているものですか？」

「おっ、鋭いな。……よっ、と……。」

カシウスは懐に抱いている毛布の中身を、エステルたちに見えるように少しめくって見せた。

「ふえっ………。」

そこには頭に包帯を巻いた黒髪の男の子がいた。寝ているのとは違って意識を失っているものと思われ、身じろぎ一つしなかった。

「わりとハンサムな坊主だろ？」

「な、な、な……なんなのこの子ー!」

エステルは驚きを隠せずに大きな声を出した。

「エステル、そんなに大きな声を出しちやいけません。男の子が起きてしまうでしょう?」

こんな時でもレナは冷静だった……。いや、訂正しよう。

「あ・な・た? どういう事かきつちりとお話してくれるかしら?」

「おつ、おい。レナ?」

カシウスが見たのはレナの手握られた包丁らしき鈍く光る刃物だった。

「しゅらば? ねえ、しゅらば?」

「まつ、待つてくれ。理由を説明させてくれっ!」

「理由言ひ訳ですか? まあ聞きましよう」

台所に刃物を置き、カシウスにひと時の安楽が訪れた。

「手当はすませているが、ベッドで休ませる必要があるな。その間に話させてくれ」

「いいわ、エステルはお湯を沸かしてくれるかしら?」

「らじやー!」

そして、ぐったりしている男の子をカシウスはベッドに横たえて話し合う時がやってきた。

「よく寝てるね。この子、わたしと同じぐらいだけど……。こんなに真つ黒なカミは初めて見るかも」

「確かに見事な黒髪だな。ちなみに瞳の色はアンバーだぞ。」

「ふーん」

「それであな、そろそろ話してくれるかしら？」

その雰囲気が一気に氷点下まで下がったかのような気がした。

「ハイ、ワカリマシタ……。」

「ひよつとして隠し子？もしかして私を裏切っていたの？」

鬼の目にも涙なのか、レナ^母の目に涙が浮かんできたのを見たカシウスは、どんな魔獣に遭ったとしても平常心でいられるはずなのにレナには敵わない様子だった。

「断じて違うから。俺はお前を裏切ったことなんて一度も無いぞ。今までも、そしてこれからもずっと……。」。

「あなた……。」

「ほえっつ。」

今までの状況を一転させて、その場に漂う雰囲気にしたたまれなくなったエステル^母の
声が響いた。

「……。それでしたら、この子の正体は？」

レナはエステルに見られていたのが恥ずかしくなったのか、佇まいを正してカシウスを問い詰めた。

「この子は仕事関係で知り合ったばかりなんだ。まだ名前も知らなかったりする。」

「仕事って遊撃士の？」

「まあな。おっと……」

「目を覚ましたようですね？」

カシウスとレナの視線が連れてきた黒髪の少年に向く。すると段々と目を開けつつある少年がそこにいた。

「わっ、本当にコハク色……」

「……ここは？」

「目を醒ましたか、坊主。ここは俺の家だ。ひとまず安心していいぞ。」

「……どういうつもりです？」

どうやらこの少年には思うところがあって、ここにいることが気に食わないらしい。それを如実にしているのは眉間に寄ったシワかもしれない。

「正気とは思えない。……どうして放っておかなかったんですか？」

「どうしてって言われてもなあ。まあ成り行きってヤツ？」

「ふ、ふぎけないで！カシウス・ブライトツ！あなたは自分が何をしているの

か………。」

「こらっ！」

エステルの肘が黒髪の少年に当たる。……結構強めに。

「ケガ人のくせに大声出したりしないの！ケガに響くでしょ！」

「………だれ？」

「エステルよつ。エステル・ブライト！」

エステルの存在に今気づいたようで、ややしばらく後に聞いてみた。

「っ、そんなことを話しているんじゃない！」

——ゲシッ、ゲシッ——

またエステルの肘打ちが少年に当たった。これもまた強めに……。

「あつ。」

「大きな声を出さないつ。」

「わ、わかつたよ。でも君の行動の方がよけいに怪我に響くんじゃ……。」

「なんか言つた？」

口を一字に結び、エステルは少し怒つたように口を開いた。

「だから怪我を悪化させる……。」

「な・ん・か・言・つ・た？」

「何でもないです……」

エステルにタジタジの少年だった。

「もう、エステルもこの子は人が人なんだからもう少し優しくしないとね？」

しかしレナも、エステルの怪我人を怪我人だと思わない行動に驚いたのかやんわりとたしなめた。

「う、うん……」

「まあ、ここではレナに逆らわんほうがいいかもな……。本気で怒らせたらオレでも敵わない。」

「そうみたいですな……」

さっきのやり取りを見ていた少年も、レナの恐ろしさが身にしみたのか小さめの声で返事する。

「ところでなにか忘れていないことない？」

「えっ？」

「名前よ、名前。あたしもさっき言ったでしょ。こつちだけが知らないのってくやし、不公平じゃない」

「あ……」

「まあ、道理だな。今更隠していても仕方あるまい」

エステルの発言にカシウスも同意する。その横では、微笑みを浮かべたレナも頷いている。

「分かり……ました。僕の名前は——」

用語説明

・ 百日戦役・

百日戦役①で説明した通りのが生じました。七曜暦しちようれきと言うのが西暦に当たりませんが、七曜暦1192年春に生じる。原因はまだ出てこないが、「ハーメルの悲劇」が関係している様子。

・ ハーメルの悲劇・

百日戦役の少し前ぐらいに起きた出来事。百日戦役と逆で帝国の領土内にあるハーメル村にリベール王国の武器を持った猟兵が侵入し、数人の生存者を残して全滅に至る。それを口実に百日戦役勃発。

・ 導力器通称『オーブメント』・

導力で動く機械仕掛けのユニット。中には七耀石セプチウムを加工した回路が格納されており、その機構に応じて様々な現象を起こすことができる。50年前に発明されてから、またたく間に大陸全土に広がり、照明・暖房・通信・兵器・魔法・飛行船など様々な技術に応用されていった。

・遊撃士協会・

地域の平和と民間人の保護の為に働く遊撃士たちの民間団体。大陸全土に支部があるため、少なからぬ影響力・発言力を持っている。

遊撃士は最初見習いと言う準遊撃士から始まり、実績を重ねることによって正遊撃士となる。正遊撃士はその人格・実績に応じてAからGの7階級に区分されている。

公式での最上級階級であるA級遊撃士は大陸全土で20数名程度。非公式にはさらに上となるS級が存在し、国家に大きく関わる事件の解決をした者に与えられている。S級遊撃士は大陸全土で4人しか存在しない。

「国家権力に対する不干渉」を規約として掲げることにより、ゼムリア大陸各地に支部を持つている。その中立性から、時には国家間交渉の仲介役を担う場合もある。紋章は「支える籠手」の紋章を掲げる。

・猟兵団・

イェリガ
 猟兵団とは特に優秀な傭兵部隊を呼ぶ称号で、ミラ次第でどのような——非武装の民間人を虐殺するような——仕事であったとしても躊躇うことなく請け負うため、民間人保護を目的とした遊撃士協会とはしばしば対立することがある。

人物紹介

レナ・ブライト

エステル・ブライトを娘に持ちカシウス・ブライトの妻。原作では百日戦役で倒壊した時計塔から我が子を庇ったことにより死亡する。しかしこの作品では亡き者ではない。

エステル・ブライト

七曜暦1186年生まれ。原作が始まる頃に16歳を迎える。カシウスから教わった棒術を駆使して戦う。外見は長い栗色の髪をツインテールにしており、色気はないが素材は良しと評されている。人々に親しみを与える天真爛漫な性格で、持ち前の明るさと前向きさで出逢った多くの人々に影響を与えるが、本人は自分の良さには無頓着。趣味はストレガー社製のスニーカー集めと釣り。

カシウス・ブライト

45歳。気さくな性格の持ち主だが、実は大陸全土に4人しかいないS級遊撃士の1人。かつてリベール王国軍において大佐の階級で働いていたこともある。剣聖と呼ばれるほどの剣の使い手だったが遊撃士になった折に剣を捨てて、棒術を扱うようになった。こちらも達人クラス。

知略においても、先を遠く見通すほどに大変優れ、百日戦役では軍事戦略上革命的な反攻作戦を立案・指揮して王国の危機を救った実績がある。名実共にリベールにおける最強の代名詞たる人物で、娘のエステルを始め、彼を尊敬し目指す者は多い。

黒髪の少年Ⅱヨシユア・ブライト

七曜暦1185年生まれ。カシウスによつて保護された少年。5年前にブライト家の養子となつたエステルの義弟。

「端正な顔立にリベールでは珍しい漆黒の黒髪と琥珀色アンバーの瞳をもつた美少年であり女性からしても、また女装が非常に似合う（笑）

番外編①

カシウス side

「はあ．．．はあ．．．．．」

俺は急いでいた。それは百日戦役が終戦に向けて動き出してからだ。ロレントを襲ったと言う報告を受け、いてもたってもいられなくなったので、部下に無理を言つてロレントに一時帰還するためだった。

「無事でいてくれよっ」

誰もが思うことだろう。自分の家族の安否を確認したいという思いは。そしてほかの連中にも両親であれ、恋人であれ、家族であれ確認したいのは山々だが俺に――。

『行つて下さい、私たちのことは大丈夫ですから。体を削つてまで終わらせようとして下さったのですから少し早めに戻つても誰も文句なんて言いませんよ』

と、皆が口々に言った。

――ありがとう――

ロレントのような田舎にも、目をつけた連中がいたという事に少しは驚きもした。それに、カシウス・ブライトの家族がいるということがバレているならアキレス腱を断ち

切るために行動したのかもしれない。とにかく今は急ぐことが第一だった。

ロレントの郊外に差し掛かったのでそれまで休みなく早めていた足を歩きに変えて、眺めてみた。

「おや？あまり壊れていない？どういう事だ」

想像していたのは、砲撃により無残に破壊され尽くした町並みを予想していた。が、そこにあつたのは想像より綺麗に立ち並ぶ家々だった。

「カシウスさんじゃありませんか」

「クラウス市長？こ、これは一体・・・」

遠くからカシウスの呆然とした様子を見て近寄ってきたのはロレントの市長クラウスさんだった。

「それは・・・」

——説明中——

「そんなことが・・・。という事は私の家族も無事なんですね？」

「ええ、見に行くときよいでしょう。こうしてロレントの住民は負傷者がいたもの、死者はおらず皆が安堵を浮かべているのが分かるでしょう？」

「そうですね、それにしても・・・その青年が気になります。クラウスさんは気づいたことはありますか？どんな小さなことでもいいんです。なにか・・・」

ホツと一息ついてから、当たり前前とも思える疑問を市長に尋ねてみた。

「——彼かの者が顕れる時、ゼムリアからの使者と知れ。人ならざる者、しかし恐るにたらず。慈しむ心と共にあり。聖獣を従えし神獣なり——と伝承にあり、それが……」

「その青年と合致すると言う事ですか？」

クラウス市長は伸びた髭を片手で触り、そう告げる。言われてから気づいた。確か自分も同じようなことをどこかで聞いたような気がしたのだ。

「私もどこかで……。でも、それは今は重要なことではないですね？」

「そうじゃな、今は住民が一丸となつて復興せねばならん時じゃ。お前さんも家族のもとに行くといいさ。街のことはそれから話そう」

「ええ、気遣い感謝します」

カシウスはロレントから少し離れた自宅に向かった。その途中で、妙な気配を感じながら……。

——バタンツ——

少し強めに扉を開いた、それは無理のないことだ。

「レナ、エステル。無事だったかい？」

「あつ、おとーさん。おかーさん、おとーさんがかえつてきたよっ!!」

「あら、あなた帰ってきたのね」

「はあつ．．．はあつ。無事でなによりだつ」

無事な二人の姿を見てカシウスは言葉少なめになった。そして落ち着いてから助けてもらったときのことを尋ねてみた。

「レナ、エステル。助けてもらったときのことを教えてくれるかい？」

「うんつ、いいよ。えーと．．．おかーさんの上に時計とうのはへんがいつぱい落ちてきたの。それからおかーさんが血をながしたときに、おにーさんからあつたかい光があふれてきてあつという間にけが治つたの」

「私も意識が薄れていたのですが、エステルの近くにいたと思われる男の人が手をかざすと光が溢れてきて、体が軽くなつたのを覚えています。その後、その人は市長さんに連れられて怪我人が大勢いるところに行つたそうです。聞いたことのないアーツで全員を治したそうで．．．」

「フム．．．。その青年はそのあとどうしたか分かるかい？」

「ううん、わかんない」

「私も分かりません。市長さんは“消えた”とおっしゃいました。それとこの事はあまり軍には言わない方が良くと箝口令ではありませんが、住民の皆さんに言つたそうです」

エステルは、両親の横で青年がやつたと思われる怪我の治し方をジェスチャーで再現

していた。よほど嬉しかったのだろう。

「こう、おにーさんが手を当てると。パーツと光が出てケガ治ったの!」

「そうか・・・」

その様子をレナは微笑ましく見つめ、カシウスは頭を撫でながらその青年のことを思いに留めようとしていた。それは警戒心からではなく、ただ大事な家族を救ってくれたことから来る感謝の念に溢れていたものだった。

——いつか、いつの日か会える時が来たらその青年を招待して、言えなかったありつたけの感謝を述べるんだ——。それがカシウスの夢となった。

「ねえ、あなた・・・」

「ん? どうかしたかい?」

「最近ずっと誰かに見られているような気配がするのよ・・・」

それは寝耳に水だった。無理のないことだ、カシウスの家族がここに居るといふ事が明らかになっていれば、それを狙ってくる連中もいるということ。

「いつからだ?」

堅い口調になった。が、それもすぐに呆気にとられることとなる。

「あ、安心して。その気配はすぐに消えるの。その監視しているような気配が消える」と誰かに見守られているという気配が変わるのよ・・・。不思議ね」

「へっ……?」

見ると、レナは片手を頬に当てて『ホホホ』と笑っている。その気配の正体に気づいていると言わんばかりに……。

「まさか……」

「うん、私はそう思っているわ。それは私たちを助けてくれた時と同じような雰囲気
が漂っているもの……」

これにはカシウスも更に度肝を抜かれたことだろう。市長から伝承のことは聞いているし、自分もそれについては聞いている。ただ、*“聖獣を従えし神獣”*の時点で人は関係を持ちたくない……そう思っていると考えていたからだ。

「ま、まさか……。さつき微かに漂った気配の正体って」

「うん、あなたが帰って来るまでの間ずっと感じてたけど今はもう見当たらないもの……」

レナはカシウスの妻という事もあって武道家ではないものの、護身術ぐらいの腕はあるし気配を察知する能力に長けていた。

「ま、何にせよ。俺たちは何度も助けられた……それでいいじゃないか?」

「ふふっ、そうね。さっ、今日はあなたも久しぶりに帰ってきたことですから家族三人で美味しいものでも食べましょうか」

「やったー。おカーさんの料理っておいしーんだよつ。あつ、わたしもてつだうー」
今日は久しぶりに賑やかな夕食になりそうだ。これもロレントの街に現れた青年の
起こした奇跡だったのかもしれない。

カシウス side end

——カシウス家上空——

そこに一人の青年が浮いていた。横には聖獣レグナートと呼ばれる龍と一緒に浮か
んでいた。

『よろしいのですか。あのような形で介入されて・・・』

『いいさ、人の優しさに触れそしてそれを潰すのは勿体無い事と判断したからな。そ
れにしても・・・』

『どうかされましたか?』

『レナとエステルを狙う連中がこんなにもいたとは・・・』

『フフフ・・・』

思い出すのは、百日戦役が始まってぶらりと立ち寄ったロレントの街での出来事だっ
た。ここで住民を治したのは記憶に新しいことだったが、流れ弾に当たって亡き者にしよ
うとしたり直接、殺そうとしたりと一年の間忙しく行動する結果となった。

『レグもレグでカシウスが知り合いだったり、驚くことばかり』

『そうでした。数十年前、戦いを挑まれて人間にくせにようやるもんだと驚いたものです。それから友人となりました』

『レグの友人を亡き者にするのは俺の流儀に反する。さて……ここはもう大丈夫だろう』

『はっ。では先に失礼いたします』

翼をなびかせて高高度まで上昇し、たやすくその姿を小さくしていった。

「まったく、俺が人に……ここまでのめり込むことになるとは……。分からないものだね……。これだから人生って面白い」

その青年もカシウスの家を一瞥した後、その姿を消した。

旅立つ二人

「あたし、ヨシユアと一緒に旅に出るわ!!」

それはエステルとヨシユアが準遊撃士になったその日のことであった。その場に連絡のないカシウスの姿は無かったが、家族三人で夕食を囲んでいるときにエステルから提案があった。

ややもすると、それは唐突な提案だったかもしれないがエステルとヨシユアは準遊撃士になってからすぐに決めていたことだった。

でも、レナを置いていくのには少しの懸念があった。でも二人にはどうしても行かなければならない理由ができた。それは……。

「どうしたの、急に……?」

「あのね、お父さんの事なんだけれど……」

「ん?あの人がどうかした?」

それまで沈黙を守ってきたヨシユアが、口ごもるエステルに代わって理由を話した。

「先程、準遊撃士になった直後ですが、お父さんが乗った飛空艇が消息を絶ったと言うのを聞いたんです」

「そー．．．だったの？」

「っ．．．」

エステルはテーブルの下でギュツと服をきつく握り締めどうにかして見つけたいと思っていた。

「あ、あの。それで、ですね．．．手ががりを見つけようと各地を回ろうかと思いましたが．．．」

ストーンと自分の椅子に座り、不安を隠せない様子のレナにヨシユアがしどろもどろになりつつ、話をしていた。レナが黙ったのはショックを受けたからだと思い込んでいた二人だったが、このあとカシウスの妻としての感情を露わにした。

「うん、いつてらっしやい!!お土産は何もいらわないわ」

「はい？」

「ん?どうかした、鳩が豆鉄砲を喰らったかのような顔をしちやつて．．．」

顔を床の方に向けていたので、どんなふうにして言えばいいのか二人であれこれとシミュレーションをしていたが、全ては無駄になったようだ。

「そ・れ・に、エステルはもう一つ譲れない目的があるんでしょ？」

「へっ?」

エステルのもう一つの目的は、ヨシユアにも告げたことのない昔のあのことだった。

「う、うん……」

「エステル?今、ヨシユアに黙ってていたたまれない気持ちになっちゃった?大丈夫よ、明日行くときに時計塔でお話しちやいなさいな?」

ヨシユアが自分に内緒の出来事があつて、それがエステルの中で大事な部分を占めていることに少なからずショックを受けていた。それに対して『思い出のあの場所です打ち明けちゃいなよ』的なノリの母親の後押しを受けてエステルは乗り越えることができた。

「つて、明日?」

「早いほうがいいでしょ?それとも何?私の娘は思い立ったが吉日に決めていたんじゃないの?ほれほれ、行った行った……!」

「うん」

「分かりました……」

レナの元気な様子に何も心配する必要はないと感じた二人はそれぞれの部屋に行つて寝る支度をするのであつた。

——レナの本当の気持ちに気づくことなく——

「ねえ……あれから私もツテを頼って探しているし、あの人も遊撃士の仕事の帰りとか探しているのに見つかからないのよ。あの人は何者だったの？」

一人になった自室で自問自答しているが、どうやっても答えは見つからなかつた。達観したような眼差しもどこか別格な様子を醸し出していた。

「まあ、エステルの事だもの。私とあなたの子ですから、猪突猛進で突つ走るしかないんでしようけれども……。どうか、見守ってください」

夜遅くまでレナは眠れなかつた。それは旅に出る二人の子供たちの安全を祈つてのことだったかもしれないし、また違うことだったのかもしれない。けれどその中にカシウスの事は入っていないかつた。

「あの人はどこに行っちゃつたんでしようか？大陸で数人しかいないランクの持ち主ですから、心配はしていませんよ。けれど、戻ったら覚えておきなさいよ？」

同時刻、カシウスの身に寒気が走つたのは無理のない事かもしれない。

——次の日——

ブライト家から見送りをするレナ。その姿が見えなくなるまで振り返りつつ歩を進める二人だつた。そしてエステルはヨシユアに話するために時計塔へと登つていった。

「ふう、やっぱり気持ちいい風が吹いているわ。ねえ、ヨシユアもこつちに来てよ

？」

「あ、ああ……」

緊張した面持ちでエステル横に並び、同じ方向を向く。

「少し昔話をしてもいい？」

「……うん」

「ありがと……。この街も百日戦役で燃えたのは聞いています？」

「触り程度には聞いているよ。でもどうしてこの街は残っているんだい？」

「当たり前とも言える質問を投げかけてきた。」

「初めて聞くと思うけれど、この街には奇跡が一度起きているんだ……」

「奇跡？」

「うん……」

エステルは深呼吸を一つすると、ヨシユアの方を向いて切り出す。まるでこの話が神聖で話すのも咎められるかのような……。

「百日戦役の時、この街は一度燃えた。そして時計塔も崩れその下敷きになったのがお母さん……」

「えっ、ちよつと待ってよ。お母さんには後遺症らしき傷なんてどこにもなかったじゃないか？」

「うん、それが奇跡……。時計塔が崩れたときどこからともなく、一人の男性が現れた。そしてお母さんを含めて街の人全員を一瞬で治したんだ……。聞いたことのないアーツを使つて……。そしてそのまま消えた」

「……………」

「信じられない？でも、これがあの時生じた事なんだ。そしてあたしの目的はその人を探し出して、『ありがとう』つて言う事」

「そうなんだ……。じゃあその人も見つけないとね？」

「うん！」

こうして準遊撃士になりたての二人は、過酷ながらも楽しい旅を開始するのであった。

—— 龍ヲ探シテ………… ——

—— レグナートガソノ鍵ダ………… ——

—— ソレガ盟主ノオ目的………… ——

—— 使エルモノハ全テ活用セヨ ——

女王と親衛隊隊長

ここはリベール王国。アリシア・フォン・アウスレーゼ女王が、国家元首として王国に君臨しており通常だったら、厳肅に全ての事が運んでいる状態だったのに……。その様子について、王室親衛隊隊長のユリアが見たままを説明してくれるみたいだ。彼女のひとり言に耳を傾けてみよう。

私はいつものように陛下を起こし、それから食事をとる陛下に一日のスケジュールを説明、その後は有事に備えて訓練に明け暮れる毎日を過ごすはずだった。それが訓練できかない事態に陥った。きつかけは部下の信じられない証言だった。

「ユリア隊長ーっ。へ、陛下が……」

「落ち着け、何があった?」

はあはあと息を切らしながら私のもとに、走り込んできた部下がいた。それでその部下を落ち着かせながら、他の部下たちを集め寄せ殿下の元に馳せ参じようとした……。

「へ、陛下が踊ってます」

「……はあ?」

その言葉に一気にその場に漂っていた緊張が拡散した。腰を抜かした部下もいたら

しい。だが、私はしつかりしてないといけない。それであらんかぎりの冷静さをふるつて、どうしようもない報告をした問い詰めようとした。

「・・・もう一度聞くぞ。お前は陛下の何を見た？」

「はっ。自分が陛下を呼びに行つたところ、声をかけても返事のなかつたので扉を少し、少しだけ開けて中を確認したところ・・・」

「・・・陛下が踊っていたというのか？」

「ひい。は、はい・・・」

尋問のようになっていたのだろうか、部下が一步後ずさりつつも答えた。走ってきた時に吐息を確認したが、酒に酔っているわけではなさそうだ。それにクスリをやっているわけでもなさそうだ。それを見たのは一人だけなので真偽の程を知るため、私が行つて確認したほうが良さそうだ。親衛隊の間にも動揺が広がりつつあるからだ。

「大体の話はわかつた。ほかの皆は訓練に行つてくれ。私は確認しに行かねばならぬ。この事案に関して口外する事は断じてならん。口外した奴についてはこれもあるからな？」

と言いつつ、手で首を搔つ切る仕草をした。すると、揃つたように首を縦に振り続けた。

——そのまま振っていると首、痛めるぞ——

自分でも何、場違いな事を？と思いつつ殿下の元に急いだ。

グランセル城に国家元首のアリシア女王がいる。厳格でいながらそれでいて民衆に好かれ、二つの大国に挟まれつつも平和なのはアリシア陛下のおかげと言っても過言ではない。それが踊っているなんて……。

「ふっ、私も部下の冗談を本気にしてしまうなんてどうかしている。……疲れているのか、しばらく休暇でも取ろうか……」

などと考えているとアリシア女王が、いつもいるテラス付きの部屋の真正面までたどり着いた。耳を扉に付けてあわよくば部屋の中の音を聞けるかどうか試してみた。

「~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪」

どうやら鼻歌を歌っているようだ。……ん？歌って……いる？この時間はまだ執務の時間のはず、朝一で殿下のスケジュールを確認した時にそのように聞いているのでこれはおかしかった。

「へ、陛下？今お時間よろしいでしょうか？」

少し声が震えてしまった。

「っ、ユリアさんかしら？どうぞお入りなさいな……」

中から慌てた声も聞こえてきた。テラスに出ていたのだろうか、声が小さかったのが段々と大きくなってきて扉の近くから声が聞こえた。

「は、失礼します」

そこにいたのは見た目はいつもの陛下だった。いや、少し息が切れていたと言う違いがあつたけれども。

「どうかしましたか、ユリアさん？」

「親衛隊の部下から陛下を心配する声を聞きましたので、安全を確認するべく参上いたしました」

「あら、そうだったの？でも私は無事よ。ホホホ……。それで、聞きたいことはそれじゃないはずよね？ユリアさん、あなたはどうして私の元に来たのかしら？」

微笑みのあとの質問だ。これにはユリアも体をこわばらずにはいられなかったようだ。まるで蛇に睨まれたねずみのように……。

「そ、それは……ですね。部下の一人が声をかけても出てこない陛下を心配しまして、部屋を開けたところ踊っているところに行くわしたんです。こんなことは今まで一度もなかったので、親衛隊一同どうしたのかと思つた次第です」

しどろもどろになりつつ、ユリアは自分が言いたかつたことを全部告げることができた。伏し目になりながら返事をしたが、アリシア女王から何もなかつたので怒っているのかと思ひ目を上げてみると、そこには見たことのないペンダントを片手で触りながら微笑んでいる女王がいた。

「陛下、それは？」

「ああ、これ？これはね、私が踊るぐらい嬉しかったとある男性から貰ったものよ。あれから数十年経つてようやく再会できるものね……。嬉しきは隠せないわ」

見たところそれは白一色の水晶のように見えた。しかしユリアにとってそれは見たことのない物質だった。それで聞く事にした。

「陛下、その……見たことのないペンダントですが何で出来ているのですか？」

「これは、ゼムリアストーンで出来ているのよ」

「はっ？」

驚く答えが返ってきた。ゼムリアストーン……これはまだ加工する技術が整ったばかりの物質。しかし女王の話の流れからすると、数十年前に貰ったものだと言った。と言う事は送った人物は、少なくとも十数年前に加工する技術を持った者の仕業だということが分かる。

「ユリアさんにも信じられないかもしれないわ。でもこれは本当の話。あとは本人に聞くしかないかもしれないわ」

「は、はあ……。もう一ついいですか？」

「ええ、何でも聞いて」

上機嫌な女王を前にしてまたもや見慣れないものについて聞く事にした。それも加

工された形跡などひとつも見られない七曜石だったからだ。値段は跳ね上がり、こぶし程の大きさでも数百万ミラはする代物なのにここにあるのは大人の頭より少し大きいぐらいの物だった。

「そこで輝いている物は一体？」

「これもあの人が、再会する時まで持つていてと言われて預かった国宝級の品物よ。値段・・・付けられないぐらいでしょうね・・・」

ユリアは考えた。陛下にこれほどまで慕われている存在の男性とは一体何者なのだろうか。最初はお金目的や王族を狙つてのことと思いましたが、それも有り得ない事。お金目的なら殿下の持つている二つの品物を預けるなんてしない。それに王族狙いだとしても数十年も待たせるだろうか？

段々とその人について何もかもが分からなくなつてしまった。しかし、その反面どんな人なのだろうかと会うことについても期待を抱きつつあった。そしてそう遠くないうちに女王とユリアは出会うのであった。

マノリア村

マノリア村……。田舎でありながらも風情がある村。そして海を見渡せる場所には大きな風車が回り、日曜学校が開かれもする……。時間がゆっくりと流れているかのような村にその青年はたどり着いた。白い花が咲き乱れているのは木蓮の一首のようだ。

「……良い匂い……。ここか？」

どうやらこの青年は、美味しそうな匂いに惹かれてこの村にやってきたようだ。青年は知らなかったが、彼が助けた母親を持つ少女もここを目指していた。

——白の木蓮亭——

「……いらつしやい、おや見慣れない方だね。旅人かい？」

「……まあ、そんなものだ。良い匂いがしたので来たのだけれど、料理を頼めるだろうか……？」

「お安い御用だ。ちよつと待つてな。すぐ作るから……」

「……」

青年は、キョロキョロと辺りを見渡してみる……。この建物は木造の作りをしていて、とても落ち着く雰囲気醸し出していた。

「今時期は、スモークハムのサンドイッチと魚介類のパエリアの二品があるのだけども、どっちがいいかな？それとも二品とも食べるかい？」

「どちらも美味しそうだ。二品お願いするよ」

「嬉しいねえ・・・お兄さん気に入ったよ」

白の木蓮亭とは宿場兼食事処と言った所だろうか。男性は妻との合作でよく売れていると独り言を呟きながら手際良く料理を作っていた。室内には数人のお客さんがおり、村人なのだろうか・・・会話を楽しみながら美味しいとほおぼっていた。

「・・・・・・・・」

「へい、お待ちー！スモークハムのサンドイッチとパエリアさ」

「ありがとうございます。いただきます」

両手を胸の前で合わせ、食事に感謝して食べる。

——うん、美味いっ！——

横ではへへへッと笑うご主人がいて・・・少し煩わしくも嬉しかった。そして厨房に入っていた。みるとそこに若い男女がこの建物に入ってくるのが横目に見えた。

「ようこそ、〝白の木蓮亭〟へ。見かけない顔だけど、マノリアには観光で来たのかい？」

「ううん、ルーアン市に向かう途中なの」

「クローネ峠を越えてきたんです」

「クローネ峠を越えてきた??はく、あんな場所を通る人が今時いるとは思わなかったな。ひよつとして山歩きが趣味とか?」

木蓮亭の主人は心底驚いた様子だ。どうやらこの若い男女はあまり通る人がいないところを、通つてマノリア村へ来たようだ。

「うーん・・・そう言う訳じゃないんだけど。ところで歩きっぱなしですつごく疲れているのね」

「なにかお勧めはありますか?」

「そうだな・・・。今ならお弁当がお勧めだけど」

「お弁当?」

「町外れにある風車の前が景色のいい展望台になっていてね。昼食時は、うちで弁当を買つてそこで食べるお客さんが多いんだ」

「あ、それナイス。聞いているだけで美味しそうな感じがするわ」

「それじゃあそうしようか、どんな種類の弁当があるんですか?」

乗り気な女の子に同意して男の子が弁当の種類を聞いていた。

「(俺もそうすれば良かったかな?それにしてもあの女の子・・・)」

青年はすでに二品を食べているのに、食い意地が張っているのか？弁当の話を聞いて食欲が増しているようだった。そして自分の両目で見ている先には、オレンジ色の服を着ている少女が写っていた。どこかで見覚えのあるその少女が気になって仕方ないようだ。

女の子はスモークハムのサンドイッチ、男の子は魚介類のパエリアを頼んでいた。

「そっか、ここで食べることもできるけど弁当というサーブिसもしていたんだ。景色を楽しむのはまた今度にしよう。ここは美味しかったな……。レグにも教えておこうか……。あ、でもレグは人化出来ないのか。一緒に食べることはできないけれど包んでいこうかな？」

思考しているうちに二人は外へ出る準備をしていた。そして横には二品を作った主人がいた。手にはとても良い匂いのする飲み物を持ってきていた。

「これはうちで食事してくれた人にサーブिसしているハーブティーだ。良かったら飲んでくれないだろうか？」

「ああ、貰うよ……。うん、美味しい……。」

「そうかい、そりゃあ良かった。兄さん気に入ってくれたようだし、また来て下さい」
食べた後の余韻を堪能してから料金を払い座っていると、外からも何だか懐かしい気配を感じた。

「おや？ 久しぶりに懐かしい気配がする？」

「ヨシユア、早く早く……」

「ちよつとエステル。前を見て歩かないと……」

先程、弁当を買つて外へ出ようとしていた二人の片方は浮かれているのか、外にいる少女にぶつかりそうになっていた。

「あうつ……」

「きやつ……」

エステルと呼ばれた女の子は、ヨシユアと呼ばれた男の子が抱えて転ばずに済んだ。ではもう一人の女の子の方は……

「大丈夫……？」

今まで木蓮亭でハーブティーを飲んでいた青年が、少女の後ろに回り込んで抱きかかえていた。

「はい……。大丈夫です」

「そう……」

そして青年は軽く手で叩き、服に付いたホコリを取つてから立たせた。少女は青年にお礼を伝えて二人の方を向いた。

「ご、ごめんね。私が前を向いていなかったから……」

「は、はい。大丈夫です。この人が助けてくださいましたし……」

エステルはヨシユアから離れて、学校の制服を着ている女の子に謝る。それに対してその女の子も、青年が助けたことよってケガが無かったことをエステルに伝えた。

「あのー私、子供を探しているんですが……」

「どんな子？」

「帽子をかぶった10歳ぐらいの男の子なんですが、どこかで見かけませんでしたか？」

「帽子をかぶった男の子……ヨシユア見かけなかった？」

「いや、見てないな」

「そうですか……どこに行ったのかしら？ではこれで失礼します」

そう言うのと村の外れの方向に向かって歩いて行った。

「……………」

「ヨシユア？ねえ、ヨシユアってば!!」

「えっ、何？」

「はっはっん♡」

「何か激しく誤解していない？」

ヨシユアが制服を着た少女に見とれていたと思つたエステルは、何か誤解しているのだろうか。とりあえずケガをしなかつた兩人から離れていこうとした青年だつた。

「あの一……」

「何か？」

それは叶わなかつたようだ。ヨシユアと呼ばれた黒髪の少年が声をかけてきたからだ。

「あなた、先程まで木蓮亭の中に居られた人ですよ？ どうして一瞬の内に……しかも倒れそうになつていた子の後ろに来ることが出来たんですか？」

それは尤もな疑問だろう。この二人が外に出るために扉を開けていたとしても、風を感じさせることもなく三人に気づかせることもない内に、転ばないように助けていたのだから……。

「……世の中には未だ知られていない移動方法があるつてもんだよ」

咄嗟に考えて出した結論は、けむにまく事だつた。超短距離転移などどのように説明すればよいのだろうか……分からなかつた。

「……」

「少年、考えているのか？」

「ええ」

ヨシユアは納得していない様子、しかしヨシユアが納得できるまでここを動かさないぞ的な雰囲気はお腹の空いた少女^{エステル}によって崩されることとなった。

「ねーえ、ヨシユア……。お腹空いたってば……。……」

「あつ、うん。分かった……。……あ、あれ？」

町外れにある風車の方に歩いてたエステルに返事をしようとして一瞬、青年から目を離しそしてもう一度青年の方を向いたときにはその人の姿はどこにもいなかった。

その答えは、上空にハイジャンプして薄くかかった雲の陰に隠れていたからだ。

「全く……。カシウスが保護したという子供はこんなにも謎の多い子に成長したのか。それとエステルって言ったか？あの時泣いて母親を助けて！って言ってた子がエステルだとは……。それに俺が助けた女の子はもしや……。……」

孤児院

空中に浮いたままの青年は、そのままの姿勢で二人の男女がいなくなるまで少しの間留まっていた。それから音を立てることもなく飛び立った時と同じように降り立った。それでもそこには小さな気配があった。それに青年がいた空より高くにも小さな気配が一つ……。

「あの一………」

「何か？」

後ろからかけられた声にも振り返ることなく返事を返した。『ヒツ』と怯えたような声を聞こえてきたがどうしようもない。俺は基本、人間が嫌いなのだ。……ただ例外は存在するが。

「ヤツキはどうもありがとうございましたっ」

腰が折れるんじゃないかと思うぐらい、90度ほど曲げてお礼を述べる少女がいた。それは倒れそうになった少女を青年が助けたことについて言っているのだろう。

「別に……」

「あつ、あのー。何かお礼がしたいんですけども・・・」

青年の感情がこもっていない発言に恐れをなしたのか、尻すぼみになっていく少女の声。いかんいかんと思いつながらも突き放すような言葉だけが自分から零れてくる。

「何かお礼を貰うことを期待して助けたわけじゃないから、それを君が気にすることは無い。要件はそれだけか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「それならば失礼する」

——もう声はかけないでくれよ・・・——

しかしそれはある意味叶わない事だった。その少女がとある老婆と似ていてポジティブだったからだ。今となつてはその時気にせず、声をかけてくれたことは青年にとつての転機だったのかもしれない。

「あなたが気にしなくても、わたしが気にするんですっ!!」

顔を地面に向けていたので諦めたかと思つていたのに、駆け足で寄つて来て青年の前に回り込みそう告げた。その少女の口からは出てくることのないものだと思つていたので、それはそれは驚きそして立ち去る機会を失つた。

「・・・・分かった。君が満足するまで君と一緒に行動するよ・・・・」

半ば諦めがかかつていた返事だったが、少女は表情をぱあつと輝かせて喜んだ。どう

してそこまで喜んだのかと後で聞いてみたかった。それでもそれは願わなかった。上空を飛んでいた鳥がけたたましく鳴いたからだ。

「ピューイツツ!!」

「っ。あ、ちよつと先を急ぎますね。……えーつとここで待つて頂けますか?すぐに戻りますので」

嬉しそう表情から一転、しかめっ面をしてT字路の森側へとかけていった。横にある看板には『マーシア孤児院』とかすかに読めた。

「なあ、どうして君のご主人は走つていったのかね?」

左腕を目の高さまで上げ、それから上空にいる異変を知らせた彼に声をかけた。すると彼はすぐさま青年の左腕に羽音とバサバサと立たせながら止まった。止まった時に、腕に彼の爪が少し刺さったがそれでも加減してくれたのだろう。

『あ、ね、あの子供に危険が迫ったの。声分かるピューイピューイピューイピューイピューイ。ピユ?』

「ふむ、危険が……。?ああ、心配しなくても君の声は聞こえているよ。大丈夫さ」
『あ、あ、あなたがツツ?ピユピユピユツツ?』

「落ち着いて……。?な?あと君の飼い主には俺の正体言わないでくれよ?」

『勿論よ。クローゼのとこ行くねピューイ♪ピューイピューイ』

「ああ、またあとでな?」

嬉しさを羽でバサバサと音を出して表現し、それから青年の腕から離れて上昇する。みるみるうちに姿は小さくなり、少女の元へと急いでいった。

「まったく………。人間じゃなかったら俺も甘いもんだ」

そう、青年の腕にいたのは人間ではなかった。羽音を立てている事や、人とは別の声を出している時点でわかっているだろうが腕にいた彼女は鳥だった。それからしばらくしてから慌てた様子の少女が来て一緒に来て欲しいと頼まれた。約束を反故にする事は、青年の理念に反しているので嬉しさを隠しきれない少女に着いていった。

「ほう………」

森の中にあつたのはこじんまりとしていながら、アットホーム的な雰囲気を出しているほんわか暖かい建物だった。読みづらくなっていた看板に書かれていた孤児院が少女の目的地だったようだ。そこで少女の名前を知ることが出来た。クローゼ・リンツと言うらしかった。

「あのーあなたの名前はなんですか？」

「私の？私はファーブラ・イニティウム・ドラコと言う。親しい人はファーと呼ぶよ」

「そ、そうですか？ではファーさんと呼びたいですね」

「うむ………。それにしてもこの家から複数の気配がするんだが……数人は子供で、あとはさっすきの男女か………」

気配を探ると、先ほど出会い頭にぶつかりそうになったエステルと疑いの目を向けてきた少年の気配を含め幼い子供たちがいることを視た。

「ファーさんは気配を探るのがとても上手なんですね？何かされていたのですか？」

「うむ、長年の経験が身に付いたのでな……。それよりもクローゼとやら……。畏まった話し方をしなくとも……。年齢相応の話し方などはしないのか？」

「こ、これが私の話し方なんです。……学友からは『堅い』とか言われますけれど……砕けた言い方をするのができないんです。やっぱり私って変……。ですか？」

孤児院の敷地に入ってから、両脇に畑があると、ところをゆつくり歩きながらクローゼと話す。

「クローゼはクローゼ……。だろ？話し方が他と違っていてもクローゼにはクローゼなりの考えがあつてその話し方を選んだ……。それでいいじゃないか？」

「そ、そうですね。ありがとうございます」

「あー、クローゼお姉ちゃんやんが男の人とお話してるーっ」

いつまで経つても来ないクローゼを心配した子供の一人が扉を開けて出てくる。それに連れられて年配の女性も出てきた。

「あらあら、もう一人お客さんですか？」

「はい、私が転ぶのを助けてくれたファーさんです。お礼がしたくて無理に誘っちゃ

いました。ファーさんこちらに来てください」

「暖かそうな雰囲気の良い家だ。きつと幸せ一杯に暮らしているんでしょな？」

「ふふつ、分かっちゃいますか？あなたも不思議な方ですね」

「??？」

「ねーねー、早くクローゼ姉ちゃんを作ったお菓子が食べたい」

それをきつかけに数人の子供たちが騒ぎ出す。それを収めようとしながらも、どこか嬉しそうな表情を浮かべている年配の女性。彼女の名はテレサと言い、テレサと亡夫ジョセフによって開設されたルーアン地方にある孤児院だった。そこには四人の子供たちがおり、テレサと共に暮らしていた。

「おじやまします」

「あなたはさつきなの!!」

椅子に座っていたのはやはり新米遊撃士の二人だった。少年の方は少し警戒心を持ちつつこちらを見、少女のほうは興味津々な様子でこちらを見ていた。

——あれが私を最初に変えた子か……——

気づかれないように横目で確認してみるが、近くで見ても確信した。あの子は私が百日戦役で助けた母親の子供。あれから随分と経っていたが男勝りなところは変わっていない。釣りが好きなどころやすニーカーのコレクターである時点で変わり者と言

えるかもしれない。

「ねえ、あなたとあたし．．．どこかで会った事ない？」

——聞いてくるか？——

「私は旅をしているからどこかですれ違ったりしているかもしれないな。君はどうしてそんなことを聞くんだい？」

「んーつと．．．昔助けてもらった事があるんだけど、その人に似ていたからよ」「そうなのか？私としては思いつきできないよ（認識障害アーツは半分ぐらい成功しているようだ。無理もない。ゼムリア時代のアーツを引っ張ってきたからな。成功率50%でも高いぐらいか？）」

当事者以外では何の話をしているのか、分からない話を繰り返しながら甘い物をご馳走になった。例えば黒髪の少年がしつこく移動方法について聞いてきたり、クローゼがエステルと何かを張り合っていたり、孤児院の子供たちが青年に懐いたり．．．と有意義な時間を送ることができた。

楽しい時間というものは早くすぎるもので、新米遊撃士の二人がルーアンのギルドに顔を出さなければならぬのを思い出したのをきっかけにそろそろ．．．と言ってそれぞれ解散することになった。

クローゼは遊撃士に着いて行ってルーアンに行くようだ。ファーもあてもない旅を

再開しようとしていたが、漂う不穏な空気を察知していたのかテレサに思わせぶりの発言を残していた。

「もし……もしあなたたちの身に何かあったらこれを」

「?なんですかこれは……」

差し出したのは手のひらサイズの結晶体。光を当てるとキラキラと輝いて綺麗だった。

「これはいぎという時のアナタの助けに必ずなるはずです……」

「どうしてここまでしてくれるのですか?」

「初めて会ってみて思うところがあります。それはあなたが本当に大事に子供たちを守っていると言う事です。だから私もそれに加担したいと思っただけです。それに……」

「それに……?」

「あなたの作ったお菓子はとても美味しかった。その恩に報いなければ……と思いましたが。と言うのは建前でして、私も子供の将来は潰したくないんです。これが理由では駄目……ですか?」

「……」

「もつと理由をあげるとすれば、私は人間が嫌いです。信用できないというか、生理的に受け付けません。しかしそれでも数人は信用に値するとみなして上手く付き合っ

来ました。あなたもその一人になると直感で思ったからです。その信用が足りないとみなした場合はこちらから切り捨てますので……。」

テレサ院長は目を数回まばたきをしてから、表情を緩めて答える。

「いいえ、ファーさんがここまでしてくださることにただただ感謝するだけです。願わくばこれが使われないことを願います」

「どうぞ。それは私からあなたへの信頼と感謝の印です。使われなければそれでいいのですがここ数日の間が勝負となるでしょう。あなたの周りが嫌になるぐらい騒々しい雰囲気ですから……」

その願いも虚しく結晶体は使われるのであった。それが結果として命を救うことになるのはこの時点で、ファーしか知らないことである。

旧知の友【改訂】

「あのっ、もしよろしかったら．．．」

そろそろその場を後にしようとしている時に、背後から澄んだ声がかげられた。体全体をその声の方へ向ける。すると案の定、クローゼが声を発していた。

「なにかな？」

「もうすぐ私の通っている学園、ジェニス学園なんです。が学園祭が開かれるんです。よろしかったら見に来てくれませんか？」

少し早口になりつつもそう言ってくる。どうして早口なのかは分からなかったが、それでも彼なりに返事だけはちゃんとしておこうと思った。

「興味がある。近づいてきたらクローゼの空飛ぶお友達で知らせてくれないか。そうしたら見に行こう」

「あつ。ありがとうございます。でも、あなたもジークと話せるんですか？」

——普通の人間は話せないし分からないのか．．．——

「イントネーションでそれなりに……な。では失礼する。テレサさん、美味しいおやつをありがとう。（何も無ければそれでいいのだが……）」

「ええ、また来てくださればいつでも歓迎しますよ」

子供たちをからかいつつ、テレサのお菓子に集中して食べているエステスはファーが出ていこうとしていることに気づいていない様子だ。彼の気配が微かなものであるせいで、直視していないとわからないレベルであることも関係している。それでもヨシユアは視界に捉えていなくてもかろうじていなくなったことに気づいた。

「あの人はいったい……」

「ん、ヨシユア。このお菓子美味しいね」

「全く君ときたら……」

「クスクス……」

エステルのぶれることのない様子に半ば諦めたヨシユアと、その様子を微笑ましく思っているクローゼ。

その後、港湾都市ルーアンに準遊撃士の登録を行なうためにクローゼがついて行き、有名どころを案内しつつも無事エステルとヨシユアは登録を行なうことができた。人手が足りないらしくこき使われることは目に見えていた。そしてヨシユアたちと別れて一人でジェニス学園へと戻ろうとしたクローゼの前に彼がいた。

「あつ、ファーさん？」

「・・・(モグモグ)」

両手にはルーアンで買ったものと思われる、加工海産物を持ち口一杯に頬張っていた。

「(ゴクン) クローゼか。どうしたこんなところで？」

「エステルさんたちを案内して帰るところです。ファーさんは？」

「ここまで来たからな、この付近に住んでいる・・・いたかもしれない知人に会いに行こうと思ってな。だが、どこにいるのか町民に聞いてみると王立学園にいるってな。それでクローゼをつてにして会えないか？」

「・・・どなたですか？私がお役に立つことができればよろしいんですが」

「コリンズだ」

「えっ？」

クローゼは学園内にいる友人の顔を脳裏に思い出しながら、目の前にいる男性が何を言ってもいいように構えていたはずだが、予想以上の返事が返ってきたことに若干戸惑った。

「コリンズ学園長・・・ですか？」

「ふむ、学園長などと言う職についているのか。ああ、俺とコリンズの関係を知りたい

わけだな。詳しくは言えないが旧知の仲としか言えないんだが」

自分の表情が固まったことに気づいて先回りして言った事にも終始驚きを隠せなかった。目の前の男性は自分より上、10歳上だとしても20代半ば、30代には行っていないかもしれないその男性が学園長と旧知の仲と言ったのだから。

「とりあえず正門前まで一緒に来ていただいて、それから確認が取れるまで待つていただいてもよろしいですか？」

「それで構わない。君も予想以上の答えが返ってきてびつくりしているのはこちらでも手に取るように分かったからな。それが人として正直な反応だよ」

「そ、そんなにわかりやすかったですか？」

ああ。と返事しておく。クローゼの顔が少々赤くなったのは夕日のせいとしておいた。

「(それにしても彼女の匂いがする。嗅ぎなれた匂いが・・・)」

彼は変態ではない。人間より数十倍匂いに関して敏感なので、範囲にいる生物の状況をすぐに把握することができるのだ。それでクローゼの匂いに昔の彼女を思い出していた。

「・・・さん。・・・アーさん!!」

「すまないな、少しボーツとしてしまったようだ」

自分の顔のすぐ前にはクローゼの顔が迫っていた。どうやら自分の思考に入り込んで黙ってしまったのを気にしたクローゼが、心配してくれたようだ。クローゼがどんな体勢になっているかに気づいて慌てるのは数秒後。

「・・・・・・・・」

それから学園の正門前までの街道ではずっと無言だった。気まずい思いをしているクローゼと、何も思っていないフアーとの間には考えのズレがあったが、それでも冷たい雰囲気ではなくほんわかとした和んでいる雰囲気だった。

「こっつ、こっつでしばらくの間お待ち頂けますか？」

「ああ、待つことにしよう」

「それではっ!!」

クローゼは小走りで学園の門を通りそびえ立つ建物へと入っていった。途中危うくこけそうになりながらもこけずに消えていった。

「ふふっ、彼女は面白いな。・・・俺がこんなにも社交性を表に出して会話するとは・・・」
彼は独りでいることが多かったせいかわ、社交性に関しては皆無と思っていたが心の中に入り込んでくるアウスレーゼ家の人々には心を開くことが多かった。

数分後、慌てた様子ではないにしても去っていったと同じぐらいの小走りでこちらに向かってくるクローゼを視界に捉えた。

「お、お待たせして申し訳ありません。学園長がお会いになるそうです。私は学園長室までご案内することになりました。どうぞ、こちらです」

「よろしく頼む」

ハアハアと荒かつた息を整えてから、ファーを案内するために先を歩くクローゼ。その表情はどこか、疑惑の目に見えた。

〈学園長室〉

——コンコン——

「失礼いたします。クローゼ・リンツ、ただいま帰りました」

「お帰りなさい。あなたが無事に帰ってきてなによりです」

数枚の書類を片付けているようだったが、その手を止めてクローゼに挨拶する老齢の男性。彼は王立学園の学園長を務めるリベールキッアの賢人であり、市長不在時にはルーアン地方の代表も務める人物だった。

「それで……ですね。学園長に会いたいという人がいるんですが……」

「このような時間にですか？」

「ええ、ファーブラさんとおっしゃる方が（ガタツ!!）が、学園長？」

「か、彼は今どこにおられるのですか？」

座っていた椅子から乱暴に立ち、目を見開いてクローゼに詰め寄りそうになる。

「正門前に待って貰ってます」

「な、なんと!!これは私が出向いたほうが良いだろうか。いや、しかしこれは正式な訪問ではないはず……。ご足労願う結果になるかもしれないが来ていただいた方が良くかもしれない」

ブツブツと小声で話し始め狼狽する我が学園の総責任者、コリンズ学園長の初めて見る姿に驚きを隠せないクローゼ。

「こちらに通してください。勿論、失礼の無いようにしてください」

「わ、分かりました」

呟いている姿を見られて恥ずかしかったのか、咳払いをして何もなかったかのように振舞おうとすることにしたコリンズ学園長だった。

〈学園長室 side end〉

「こちらの部屋の中に学園長が待っておられます。……ひとつだけよろしいですか？」

「何でしょうか？」

「学園長とはどんな関係ですか？あまり見たことの無い学園長の姿を見たものですか

ら・・・」

クローゼも気になっていいる様子だったが、部屋の中から『早く会いたい』のオーラが目に見えるぐらいだったので、簡単に返事することにした。

「気になっていいるとは思うが、明日にしてもらえないだろうか。君の疑問が解決するまで君の前から消えたりはしないさ」

「むう。約束ですよ」

そう言つて女子寮の方へ歩いて行つた。その姿が見えなくなるまで見、それから部屋の扉をノックした。

「は、はい。どうぞ」

緊張した声の中から聞こえてきた。年齢としのせいか、最後に会つた時に比べてかすれでいるようにも見受けられた。

「邪魔するよ」

そこには白く長い髭を立派にこしらえた老齡の男性の姿があつた。

「おお。私が生きている間にこうしてもう一度再会することができるとは思いもしませんでした」

「それはこちらの台詞だ。近くを通つたものでな、友がどうしているのかを知るぐらゐの事はしたいものだ。元気で何より」

「もつたいないお言葉。感謝致します」

片膝をついて挨拶をしようとするのでそれを留める。

「これは正式な訪問ではない。堅苦しくなくて構わないんだ。椅子に座って暫し語るうではないか？」

「ええ……。それにしても懐かしいです。あなたが私の幼少期に家庭教師としておられたことを思い出すことができます」

「フフフ。そうだったな。君は、物事の根本的な考えを一度覚えたらその応用を考えることができた。それぐらい優秀な子供だった」

「思い出します。一度だけあなたの完全龍化を見た時には驚きましたが……」

「それもあつた。勉強ばかりでは気が滅入る。だから気分転換がしたいと君が言ったから、腕だけ龍化したら恐るどころか興味津々に近づいてきて『乗せてください』と言つた時には驚いたよ」

「若気の至りというものでしょうか。その後、あなたに関する伝承を耳にして真相を知つたぐらいの時期に家庭教師を辞めたんです」

「うむ。伝承に捕らわれて君が萎縮しないようにする措置だった。それにこれが最後になるわけじゃないと言いくるめて去つた」

「その時は悲しい気分でしたが、それでも再会するときにはあなたに教えられた事が

身になったことを教えたくて我武者羅に頑張りました」

いつも一人でうずくまっていた昔の面影はどこにもなく、今日の前にいるのは心身ともに成長したコリンズだった。

「そっか、君も頑張ったんだな。もう坊やとかコリ坊ぽなんて言えないな」

「そ、そうですね。アハハハハ……。今日は遅いですし、職員寮に泊まられませんか？ 一つ空きがあるんですよ」

「そうか、世話になる。多分だが、この数日いや数週間の内にこの街は荒れるぞ」

「……」

聞こえていたが、コリンズ学園長はファーブラ・イニティウム・ドラコの言った言葉に何も返せずにいた。それは昔から変わらないことであつたが、彼が告げたことは全てその通りになるか近いことが生じたからだった。

「それはそうと……」

「どうかしましたか？」

くるりと振り返った彼が、思い出したかのようにコリンズに話しかけた。

「ここまで案内してくれた彼女、クローゼと言ったか。今日一日一緒にいて確信したが、彼女はアウスレーゼ家の者で間違いないな？」

「……ええ、間違いありません」

「とぼけたっていいんだけど？」

少し迷ってから目と目を合わせてそう言った。その目には戸惑いなど微塵も見せることなく教育者の威厳を保っていた。

「あなたはずっとアウスレーゼ家と共にありましたから。害を及ぼすことなど出来ない」と確信しているんです」

「ほお。そこまで高く見てくれているとは……。そうであればずっと戻るのに躊躇いを持つていたが、これは戻るしかなさそうだな」

「もしかしてずっと会っていないのですか？彼女は首を長くして待つておられますよ？」

慌てた様子でそう告げてくる。コリンズとファアの言う彼女とは、クローゼのことではないがそれに近い人物でありファアにとつて大切な人、コリンズの幼なじみとも言う存在——今は立場が違いすぎている——であり今でも連絡を取り合う仲だった。

「最近口を開けば『あのお方はまだこれられないのかしら……。』と愚痴をこぼす始末。……早く行つて元気な姿を見せて安心させてみてはいかがでしょう？」

「考えておくさ。しかしそう遠くないうちに再会すると思うぞ」

楽しい会話というのは時間の経過が早く感じるものだった。

「ふむ、コリンズよ。職務が残っているみたいだな。機密性の高くないものであれば

私も手伝おうと思つていたが・・・」

「・・・申し訳ありません。これはそうはいかない書類でして。私以外の誰の目にも触れることが許されていないのです」

先ほどのこの部屋を訪れた際に目を通していた書類を、サツと違う書類の下に隠した時点でそれが気密性の高い書類であることは見当がついていたがそれでも尋ねてみるのは本当にコリンズのことを信頼している証と言えるだろう。

「そうか・・・。では私はこれで失礼するよ。どこか空き部屋があればそこを借りたいのだが？」

「ええ、勿論です。時間が許されるならこの学園に留まり続けてもらいたいですから」
二言三言交わしてから部屋を後にし、案内すると言つたコリンズ学園長に対して丁寧に断りを入れてから借りた部屋へと足を向けるのだった。首から下げているのはこの学園の滞在許可証だった。これを持つていることによつて不審者として通報されるのではなく、正式に学園長から許可されている人物であることを明らかにしていた。

数分後には学園長から割り当てられた部屋に到着することができた。すでに夜も更けており生徒の誰とも会うことは無かつたのも一つの要因だろう。美形とまではいかなくとも、見たことの無い人物がいればそれだけで注目の対象となるのだから。

「ふふ、やれやれだ。コリ坊ぼんがあんなに立派になつてゐるなんて。それに信頼できる

人が増えたのも嬉しいことだ」

彼は人間嫌いを全面に出しているとはいえ、信頼に値する人には多少の加護を与えて見守っているのだった。今まではブライト家の人々、コリンズ学園長、アウスレーゼ家……そして今日であつたばかりの孤児院のテレサだつた。

「……………むっ!!あの方角は」

窓を開けて外を見てみると、みるみる間にある一点の方角が煌々と光り輝いてきたのを目にした。それは自然に生じることのない真つ赤な色だつた。町からは少し離れた森の中からそれは見え、明らかに真つ赤になる勢いを増していた。

「火事か」

一言呟くとその部屋を出て、コリンズがいる学園長室へと走つた。

「コリンズ!!」

「ふおっ、ファーさん。どうかされましたか?」

「火事だ。多分あの方向は孤児院の方から出ている。急いで村と遊撃士協会へ連絡をしてくれ。あとクローゼにも伝えたほうが良いだろうか。それはコリンズに任せる。私は現地へ急ぐぞ!!」

「分かりました。急いで連絡を入れます。それとクローゼさんにも私から伝えておきます。何か分かりましたら連絡をください」

扉を蹴破る勢いで入って来たファーに驚きながらも、その内容がただ事ではないことに気づいて急いで各方面へ連絡を入れた学園長だった。この孤児院不審火から始まる事件が、これからの不可解な出来事の序章に過ぎなかったのだ。

11話

孤児院の方向を見ながら敵意が見え隠れしているのも見逃さないようにする。人間とかかわり合いになると良いことばかりではないが、それでも知り合いが関わるとそれをそのままに放っておくことなどできない性分らしい。そのような傾向にあることを最近知った。

孤児院のほうには町民が放水の手助けをしているし、子供らの気配もしつかりとしている。ということはこちらがするべきことは一つだけ。実行犯らしい気配はすでに薄くなっているので孤児院の方角から来た怪しい人を尋問する事。

「何奴？^{なにやつ}と聞いたとしてもそちらから返事をもらえとは思ってもない」

「・・・っ」

無駄だとは思いつつも一言かけてみる。気配を隠したまま近づき声をかけたものだからそれ相應に驚いたようだ。暗闇で表情など見えない人影だが、驚いた時に出た息を飲む音が聞こえてきた。

「孤児院の方向から来たということは無関係というわけでもなからう。それに服から

は微かに油の臭いもする。救助に当たったのであれば何も言わずにその場を立ち去るのも意味不明な行動である。目的は命を奪うことではなく、何かしらの警告と見ると救助して立ち去る・・・と言う行動にも理由が付くが・・・そのところどうだ？」

返事は得られないまま。その代わりに腰に帯びた剣を抜くことが返事となったようだ。抜いたままこちらの顔の高さまで上げられ、ピタリと止まる。これ以上調べるとは無駄や叶わないと言わんばかりの仕草だった。

「それがそちらの返事？ 相対してもこちらの強さが分からない時点でただが知れているが？」

「っ!!」

相手は黙っていられなくなったようだ。切っ先がこちらに飛んでくる。躲してもいいが面白そうなのでそのまま見ておく。ガキンと顔に当たった音ではない音がする。すると言うのは変な表現かもしれないが、そのままだ。剣が自分にあたってサククリ刺さるのかと思えばシールドでも張られているかのように顔の表面で停止したのだ。

「ナゼ？」

仮面をしている相手からこもった声が聞こえる。何げにこれが正体不明の相手が発した初めての声かも知れない。

「それをそちらに教えるんでもっ？」

少々あざ笑うかのように『ハッ』と声をかけてみる。これでキレてこちらに向かつてくればいいのだが正体不明の相手は無言を貫いた。そして向かってくると思わせておきながらバックステップで間合いを離し、森の奥へと消えていった。ちよつと悔しかったので爪を振るっておく。力を入れていないはずなのにその行動は自分がいるところから海岸まで、三本の轍わだちより深めの道を造ってしまった。少し、いやかなり視界が開けていた。当然のように誰かがそれに巻き込まれているということもなさそうだ。

「分け身？ 質量のある分身のようなものかな？ どれ私も試してみようか・・・」

早く戻らなければならぬことは知っていたが、数分後には彼と同じような姿をした分け身が五体存在していた。

「・・・割と簡単にできたな。ふむ、触ることができないのではなく触れることがちゃんとできるという事は戦闘を行なうときに便利だ。・・・少し手間取ってしまったが火の気が感じられなくなったな。孤児院の子供たちの気配も一つとして欠けてはいないし」

これからどうするか、そして決断しようとしたとき学園長から念話が入る。もしもの時に渡しておいた自身の鱗から作った念話装置といったところだろうか。ギユツと握り締めて声に出さずに対象に話しかけると届くというもの。この場合は、鱗から作っているので使う人と届く人は限られているがなにげに使いやすいアイテムと言えるかも

しれない。

『今よろしいでしょうか?』

『構わない。何か問題でも?』

『ええ、クローゼさんなんですが取り乱して自分も現場に行くと言つて聞かないんです。夜も更けていますし、朝になったら遊撃士が現場を訪れて原因を探るように遊撃士協会には言つたんですが……。状況が許すのであれば、こちらに戻つていただけないでしょうか?』

『……。分かった。数分後そちらに向かう。私の部屋にクローゼを連れてきてもらえないか? 温かい飲み物と一緒に……。』

『お願いします』

学園長からの連絡は多少なりとも予想できたものだった。クローゼにとって孤児院は意味を持つ場所であつたからだ。一報が入つた時、伝えない手もあつたが朝になつてから伝えたときのほうがショックが大きいと思つたからだ。グツと足に力を入れ、そのまま駆け出す。風を切つて走るのは空を飛ぶときぐらい気持ちが良いものだが、今は良い気分にはなれない。数歩後には学園を囲む壁が見えてくる。そして自分が借りてい

る部屋に明かりがついているのも見えた。

少し手前でスピードを落とし降り立つ。クローゼと部屋が同じ子には学園長からの通達が行っているので今の心配はクローゼの事のみ。昔からアウスレーゼの名が付く者を見守ることはある程度決められていた。そしてクローゼは名前を隠してはいるが匂いが同じなのでアウスレーゼの名が本当は付いていることは確実。

部屋の前で気配を探る。すすり泣きが聞こえてくるのでいることはいるが、学園長の指示がなければ多分と言うかおそろくすぐにでも現場に駆けつけようとするだろう。ノックをしてから部屋に入ることになろう。

「クローゼ？入るぞ……」